

早いもので、本年もまた総会と研究集会の時期がめぐつてきました。

第一九回である。それまでに会誌『木簡研究』一九号を刊行しなければならない。編集の実務に携わる者にとつては、一年のうちで最も忙しい追い込みの時である。と言つても、今年もまたもっぱら幹事諸氏に頼りつきりで、私自身はほとんどその務めを果たせていない。特に山下信一郎氏には、その温顔に甘え、御苦労をおかけするばかりで、まことに申し訳なく、感謝の念に耐えない。残されたわずかの期間、今年もまた最後は印刷所での出張校正になりそうであるが、なんとか勤務の合間をぬつて、少しでも責務を果たしたいと思う。

本号には、一九七七年以前出土のもの一件を含め、合計七一本の出土報告を掲載することができた。御多忙のなか、貴重な時間を割いて原稿をお寄せいただいた全国の調査機関の方々に、心から御礼を申し上げたい。しかしながら、我々の努力が至らず、結果的に収録できなかつたものが少なくないのも事実である。前号の後記にも述べたが、全国の木簡情報を集約・記録し、それを調査の現場に返すというのが本誌に課せられた重要な使命の一つであると認識している。一層の努力の必要が痛感せられる

とともに、併せて会員諸氏並びに関係機関の方々の御協力・御援助を切にお願い申し上げる次第である。本号にはまた、昨年の研究集会での報告をもととした李成市氏の論考「韓国出土の木簡について」のほか、山里純一氏による琉球の木簡の紹介、高島英之、鶴見泰寿両氏による二編の書評を掲載することができた。快く執筆をお引き受けいただいたこれらの方々に心より感謝申し上げる。

木簡学会は一九七九年三月三一日の設立総会を以て発足した。第一回総会並びに研究集会が開催されたのは同年一二月一・二両日のことである。現在、二〇周年に向けて、記念出版などの準備が着々と進められている。来年は六月に長野での研究集会も予定されており、関係委員の方々は多忙を極めるなか、今後の会運営の在り方についても種々の検討が始まっている。そのようななかで会誌『木簡研究』の誌面についても一層の充実が求められている。上述したような基本的使命を維持しながら、新機軸を打ち出していくことも必要であろう。改善すべき点を含め、会員諸氏の忌憚ない御意見・御要望をお寄せいただきたいと思う。

(鎌田元一)